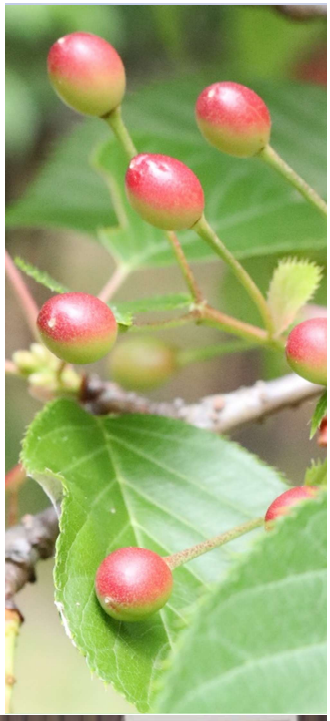
大学入門ゼミ 小豆島一日研修（1年次）

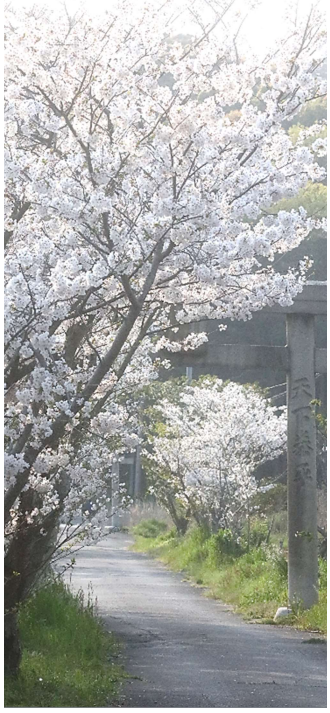
教育実習授業討議（3・4年次）

令和２年５月20日 発行



香川大学教育学部 附属教職支援開発センター センターニュース

No.8



未来からの留学生（2年次）

教育実習（3・4年次）

※表紙上部に掲載した実地教育に関する写真は、全て2020年1月までに実施した授業/実習の記録画像です。

PICK UP NEWS　2020年度の実地教育が、遠隔授業で始まりました。

香川大学では、新型コロナウイルス感染症への対応として、テレビ会議アプリケーションなどを用いた遠隔授業によって、2020年度前期の授業が始まりました。私ども附属教職支援開発センターがコーディネートする実地教育関連授業についても、遠隔授業を同時配信する方法によって授業を始めました。

実地教育関連授業は、教育学部の学年ごとに実施する授業が多く、１学年あたり160名以上の学生が１つの授業を受講することになります。ノートパソコンやWebカメラを前に、全員の姿や顔が見えない状態で進める授業はなかなか大変ですが、チャット機能や他の授業支援ツールなどを併用して、双方向性を持たせた授業方法を工夫・模索しながら、実地教育を行っています。

５月７日には３年次生向けの教育実習事前指導も始まりました。今年度の教育実習がどのようなかたちで実施できるのか、予断を許さない状況にありますが、学生の実習に向かう心構えやこれまでの学びの基礎基本をしっかりと確認し、学生を実習校に送り出すことができるよう、進めていきたいと思います。

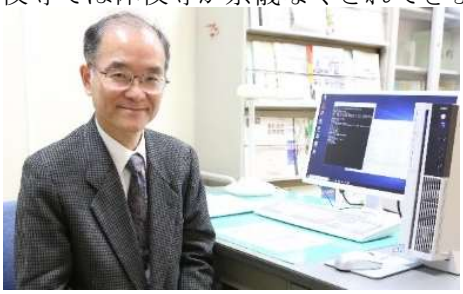
センター長あいさつ／令和２年度 附属教職支援開発センター 事業計画 ……2
[特集] 学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動 ……3
学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動　研究グループ報告 ……3～6
令和元年度 教育実践集中講座 実践報告 ……7
令和元年度 センター公開講演会 報告 ……8
着任のごあいさつ ……8
附属学校園 この１年 ～2019～ ……9～12
教育実践総合研究(第42・43号)原稿募集 ……12

センター長 あいさつ

関係各位におかれましては、お忙しい毎日をお過ごしのことと拝察いたします。日頃より本センターの事業にご協力・ご支援を賜り、心より感謝申し上げます。

本センターでは、2019年4月から、①実地教育推進、②教職支援推進、③教員研修推進、④教育開発/ICT推進の４部門で事業を進めております。2015年４月に本センターは現在の名称となり、３部門で活動してきましたが、昨年度、新たに教員研修推進部門を設置し、従来の教育開発推進部門は教育開発/ICT推進部門と改め、時代の要請に応えようとしております。昨年度、教員研修推進部門では、英語ラボ研修会I（2019年９月７日）、同II（2020年２月８日）を教職大学院等と共催し、教員研修への支援を行いました。また、教育開発/ICT推進部門では、附属坂出中学校と共同して教員研修のためのビデオを作成しました。新設および名称変更の部門の事業については、具体的にどのような内容を、どう進めるのが良いのか等、まだ模索の状態が続いております。ご意見等をいただけると有り難いところです。新たな事業が、従来からの事業とともに、学内・学外の教育において多少なりともお役に立てれば幸いに存じます。

さて昨年度末より、新型コロナ感染症の影響は広く教育現場にも及び、小・中・高等学校、特別支援学校等では休校等が余儀なくされてきました。関係各位のご苦労・ご心労はいかほどばかりかとお察し申し上げます。大学内の諸行事も軒並み中止や延期となり、本センターが従来から深く関係してきた附属学部・附属学校園教員合同研究集会（2020年３月２日開催を予定していました）も中止になりました。このため、本センターニュースの構成も従来とは若干異なっております。本稿執筆時点で今後を見通すことは難しいですが、事態が早く収束し、通常の教育研究活動が再開されることを願っております。



附属教職支援開発センター長　松村雅文

令和2年度　附属教職支援開発センター　事業計画

１　実地教育推進部門（実地教育に関する管理及び運営）＜実地教育委員長(高木)、センター＞
(1)「大学入門ゼミ」「教職概論」（１年次）＜教員養成課程主任(若井)、松下＞
(2)「教育実践プレ演習」（２年次）＜未来留担当(松本(博))、松下＞
(3)「教育実践演習」（事前事後指導）（３年次）＜センター長、山岸・久米・豊島＞
(4)「教職実践演習」（４年次）＜実地教育委員長(高木)、山岸・久米・豊島＞

２　教職支援推進部門（教職支援に関する管理及び運営）＜学生支援専門委員長(植田)、 センター＞
(1) 教職志望学生への日常的支援活動
＜学生支援専門委員長(植田)、宮前(義) ・山本・大熊・久米・豊島・片岡・宮前(淳)＞
・説明会、自主サークルへの支援、願書作成、卒業前対策講座等教採対応
(2) 教職志望学生及び現職教員への教育相談活動＜同上＞
・進路に関する相談、教職に関わる悩み等相談活動
(3) 教育実践集中講座の開催 ＜松下、荻田・葛西・岡＞

３　教員研修推進部門（現職教員研修に関する管理及び運営）＜高度教職実践専攻長(武蔵)、センター＞
(1) 現職教員への研修支援活動＜高度教職実践専攻長(武蔵)、センター長・山岸・大熊・久米・豊島・関係教員＞
・指導力向上のための公開講演会等の開催
・教職大学院現職教員研修への協力
・学内の現職教員研修各種プロジェクト（教員免許状更新講習を含む）への協力

４　教育開発/ICT推進部門（教育開発に関する管理及び運営）＜附属担当副学部長(北林)、センター＞
(1) 教材・資料の収集・管理・活用支援 ＜センター事務・松下＞
・研究資料の収集・管理、教材・機器等の共同利用のための整備、ソフト等の閲覧貸出
(2) ICT機器の活用支援 ＜松下・センター事務＞
(3) 研究活動の報告等 ＜センター長・松下・山岸・センター事務＞
・「香川大学教育実践総合研究」の編集、教育実践集中講座資料集等
(4) 関係機関との連携 ＜附属担当副学部長(北林)、センター長・山岸・松下＞
・関係機関との連携による共同研究、附属学校園等との共同研究等

５　その他
(1) 広報活動 ＜松下・センター事務＞
・ホームページ、センターニュース、パンフレット等
(2) 学部・大学院関連授業科目及び卒論・修論指導＜山岸・松下＞

特集

学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動

副学部長（学部附属連携担当）　北林　雅洋

去る３月２日に開催を予定し準備を進めてきました第20回学部・附属学校園教員合同研究集会は、新型コロナウイルスへの対応のために、残念ながら中止とさせていただきました。

全体会テーマを「学部と附属学校園との連携・協働による実地教育の推進」として、「報告①教育実地研究科目の現状と課題」を 松下幸司准教授 と 佐藤盛子准教授 に、「報告②附属学校園からみた実地教育の現状と課題」を 藤村まや教諭（高松小学校）、大和田俊教諭（坂出中学校）、圖子美由紀教諭（特別支援学校）、白川理恵子教諭（幼稚園）にお願いし、準備を進めていただいていました。

2015年度の教育学部改組以降、各附属学校園で教育実習生の受け入れ数が増えたことへの対応や、最近では働き方改革への対応等、それぞれ工夫しながら進められてきました。学部でも、一定の改善を進めてきました。それらの取り組みの特徴的な点についての共通理解と成果・課題の共有化を図ることを、主なねらいとしていました。

全体会に続けて14件の個別発表・ポスター発表が準備されていました。ポスターを掲示することはできませんでしたが、事前に送っていただいていた印刷資料については、その後まとめて、学部・附属の全ての教員に届けさせていただきました。

全体で成果を共有する機会はなくなりましたが、引き続き、実地教育を中心にして連携・協働のもとに様々な創意工夫が展開されます。部分的にではあってもできる時に、それらの成果を共有していくことが大切だと、今回のことを通して痛感しました。

研究グループ報告

1 小学校・中学校における読むこと・書くことの習得が困難な児童・生徒に対する学習支援の方法についての実践研究－Which型学習課題の開発－

佐藤明宏、附属高松小、附属坂出小、附属高松中、 附属坂出中、附属特別支援

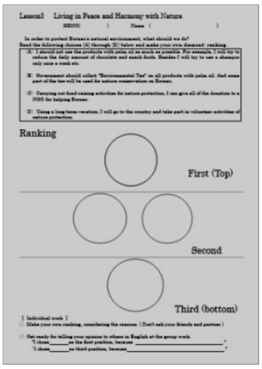
本年度、私たちは、昨年度の「判断力の育成」という研究テーマをさらに具体的に進めていくために子どもに「Which型課題」を与える研究に取り組むことにした。「Which型課題」とは、「子どもが選択・判断する学習課題」である。私たちは、このWhich型課題は、より子どもの判断力を促すだけでなく、選択肢を子どもに委ねることによって子どもの学習意欲を喚起し、それによって読み書きに困難を抱える子どもたちに、従来以上のより高い学力を育てていくことができるのではないかと考えたのである。さらにその課題を子ども自身が解決するための思考ツールも開発しようと試みた。

2 SDGsの視点による社会科・英語科の協働的授業開発

鈴木正行、附属高松中、附属坂出中

本研究の目的は、社会科教員と英語科教員のコラボレーションにより、社会的課題に関する題材を用いた教科横断的な授業開発を行い、英語と日本語を交えた言語活動を取り入れることで、グローバル社会における社会的「見方・考え方」及びコミュニケーション能力を育成することである。

題材として、私たちの生活に欠かせない存在となっているパーム油に着目し、栽培地の開発による熱帯雨林の伐採と、そこに生息するオランウータンなどの野生動物の危機を扱った。本授業は、SDGs（持続可能な開発目標）を達成するための教育の一環でもある。授業では、プランテーションを拡大するために熱帯雨林の伐採が急速に進んでいることが、地球規模の環境破壊や動物の生息域を奪っていることを確認し、「ボルネオ島の熱帯雨林に棲むオランウータンを救うために自分たちは何ができるか？」を学習課題として、英文の選択肢によるダイヤモンドランキング法を用いて、グループで話し合う学習活動を構想した。



3 中学校家庭科における「持続可能な消費」を考える授業研究

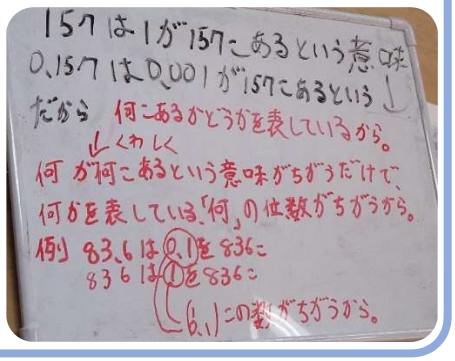
妹尾理子、附属坂出中

中学校家庭科においても持続可能な社会の担い手を育てるESD（持続可能な開発のための教育）の実践が求められている。そこで「消費と環境」領域の授業として、食品ロスの問題を調べ考えたうえで、家庭での実践につなぐ学びを構想した。その中で、本物の竹で作られた巻きすを使い、「節分の恵方巻きを手作りする」実習を取り入れた。自分の手で巻きずしを作る経験は初めての生徒も多く、伝統的生活文化を知る貴重な機会にもなった。本授業により、生活と環境問題とのかかわりを考えると共に、伝統行事に「購入して」参加するのでなく、「手作りして」参加する選択肢をもつことができ、生活実践力をつける学びとなった。

4 算数科の本質に迫る問題解決過程の質的分析

松島 充、附属高松小

本研究は、小学４年の単元「小数×整数、小数÷整数」の学習における２人の抽出児Ａ男とＢ子が本時の算数の本質にどのように向かっていくかを質的に分析することを目的とした。分析枠組みは、Sfard(2008)のコモグニション論を用いた。分析の結果、学級全体と抽出児２人の間に、３つの大きなナラティブと小さな６つのナラティブが同定された。ディスコースを進めていくためのルールは、Ａ男とＢ子に共通の３種のルールと、Ａ男の複数の証拠から整数と小数の構成の共通点について考えるというルール、Ｂ子の経験や事実を基にして考えるというルールが見出された。分析から、最後のＡ男とＢ子の異なるルールの差が、Ａ男のみが本時の本質へと近づく深い学習を実現している要因となっている可能性を指摘した。



5 中学校保健体育科における授業力向上を目指した授業映像資料の開発

米村耕平、附属高松中、附属坂出中

保健体育科における教師の授業改善を目指す際に、教師がどのような授業イメージを持ち、その授業イメージに基づいてどのように授業設計を行い、授業を評価するのかについて検討することは重要である。そこで本研究では、高松附属中学校の増田教諭による体育科の授業および野崎教諭による保健科の授業を基に、効果的な保健体育科の授業イメージを映像化し、中学校保健体育科における教師の授業力向上を目指した授業映像資料の開発およびその有効性について検討することを目的とした。映像資料については、新学習指導要領で求められる「体力や技能の程度、性別や障害の有無等を超えて運動やスポーツを楽しむための指導の充実」「言語活動の充実」「情報活用能力（ICTの活用）の育成」「体験活動の充実」「個に応じた指導の充実」を保障する授業イメージとなるよう附属教員と学部教員で検討を行い作成した。今後、教員養成段階の学生や初任者教諭などを対象に、映像資料を用いた調査を行いその有効性について明らかにしていくことが必要となる。

6 「語ろうデー」への参加は保育者の行動変容につながるか

片岡元子、附属幼稚園、附属幼稚園高松園舎

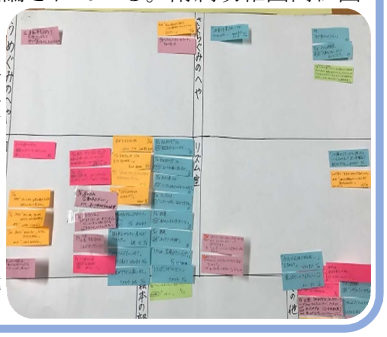
保育施設における園内研修は、保育の質の向上や保育者の専門性を高めるために重要なものである。附属幼稚園では、2018年度より保育実践や保育討議を県内の保育施設に公開することで「子どものいる教員研修学校」としての役割を果たしていきたいと考え、「語ろうデー」を実施している。2019年度は、高松園舎も加わり年間９回実施した。今年度は特に「語ろうデー」への参加が、それぞれの保育者の園での行動変容につながったのか追跡調査を行った。その中で、自身の課題に気付き子どもへの関わり方を変えようとしている若手保育者、経験年数を重ねても自分を素直に語ることの重要性に気付いた中堅保育者の声などを聴くことができた。一方で、大きな刺激を受けたものの、園ではなかなか動き出せない管理職の声もあった。引き続き、附属幼稚園・高松園舎の役割を踏まえ、自園の保育の充実と地域への発信という２つの使命を担う「語ろうデー」の実施について検討していきたいと考えている。

7 子どもの声を聴く保育評価と園内研修モデルの開発

松井剛太、附属幼稚園高松園舎

保育の質の確保・向上については、国内外において具体的な実践の方策が積極的に議論されている。附属幼稚園高松園舎では、昨年度の課題を受けて、今年度はより発展的に日常の子どもたちの声を聴き、それを園内研修に還元する園内研修モデルを開発した。

職員室に園内の場所を示した模造紙を貼って、子どもたちの印象的な声をその都度付箋で記していった。４名の教員と１名の養護教諭の５名でそれぞれに色の違う付箋を使用し、誰がどの声を拾ったのかを明示した。そして、９月から１月まで定期的にカンファレンスを行い、その間に聴かれた子どもの声をもとに保育の見直しを実施した。



その結果、計４回のカンファレンスで挙がった子どもの声の総数は、56であった。それらを分類すると、①保育観を見直す、②環境構成を見直す、③子ども理解を見直す、④関わりを見直す、の４点となった。一人ひとりの教員によって受けとる声は異なることや、子どもの声を基点に話し合いをすることで、様々な側面から保育の見直しが可能であることが示唆された。

8 知的障害児を対象とした数量概念の評価に関する試行的研究

恵羅修吉、附属特別支援

知的障害のある人にとって数量概念の理解や数量を取り扱うスキルの獲得は、生活の質の向上させるうえで重要な発達課題である。知的障害特別支援学校では、知的障害の特性を考慮し、児童生徒の認知機能の個人差に配慮した個に応じた支援が不可欠であるが、子どもたちの数量概念の習得状況を客観的に把握するためのアセスメントについては開発が進んでおらず、教師による行動観察に依拠して判断されていることが多い。本研究では、知的障害特別支援学校に在籍する生徒を対象として数量概念の獲得状況を把握する検査バッテリーを開発するための予備的調査を実施した。

9 作品になりきる活動によって獲得する造形的な視点にもとづいた鑑賞の実践

吉川暢子、附属坂出中

中学校学習指導要領美術編では表現に関する資質・能力を高めていくために、鑑賞の学習との相互の関連性を図りながら指導していくことが重要であるとしている。「鑑賞」と「表現」は表裏一体であり、独立して働くものではない。互いに働きかけあい、一体となって深め合っていく活動である。だが、生徒の意識として「つくるのは表現」で「みるのは鑑賞」のように、表現と鑑賞を対立的に捉える傾向がある。そのような問題の所在から「鑑賞」と「表現」の一体化を目指した鑑賞教育「なりきり鑑賞」の提案を行ってきた。

中学一年生を対象とした「なりきり鑑賞」の授業では、絵画作品をみるだけでなく作品に「なりきる」ことで、なりきった絵画作品から身体の動き、構図、光などを理解し、作品の造形的な工夫や効果に気づき、よさを味わうことが出来た。これらは造形的な見方、考え方を深め、様々な表現方法に生かされていくものであり、学びの獲得につながることが示唆された。

10 危険・安全箇所を点検する交通安全教育コンテンツの開発

大久保智生、附属高松小

近年、学校教育の中で効果的な交通安全教育を実施することが求められており、効果的な交通安全教育のコンテンツを開発していく必要があるといえる。今回、ICTを活用した交通安全マップ作成活動の効果について検討するため、ヒヤリハットマップとキーワードによるマップの比較を通して、小学生の交通安全意識と交通安全に関する能力に及ぼす影響に違いがあるのかを明らかにした。どの交通安全マップ作成活動が最も効果があるのかを検討するため、３学級のうち、１学級をヒヤリハットマップを作成するヒヤリハット群、１学級をキーワードによる交通安全マップを作成する行うキーワード群、１学級を交通安全マップを作成しない統制群に割り当てた。事前事後で効果の検証を行ったところ、ヒヤリハット群が最も得点が向上しており、交通安全マップの中でもヒヤリハットマップの作成が最も教育効果があることが示された。

11 子どもの視点と幼児理解・保育評価

松本博雄、附属幼稚園、附属幼稚園高松園舎

附属幼稚園および高松園舎では、教育学部との共同研究として、保育実践の中心となる遊びそのものの発展を促す評価方法の開発に継続して取り組んできた。具体的には、子どもの遊びに焦点をあてた写真を、クラスだより「しんぶん」として子どもに宛ててフィードバックする取り組みである。遊びにおける子どもの視点と「声」を保育者の見とりを介して描き出す試みである「しんぶん」は、実際にどの程度それを反映したものといえるだろうか。本研究では、幼児期の発達にふさわしいかたちで子どもの「声」を聴き取り、子どもの視点を直接的に把握する手法を探ることをねらいに、幼稚園児と研究協力者である大学生との間での「手紙」のやりとりを展開する新たなアクションリサーチを試みた。複数のケースからは、伝えたくなる相手と日々の生活に基づく経験、そのための道具立てが適切に設定されることで、幼児の「声」が言語等の表現として引き出されうることが示唆された。

12 読み書きに困難のある児童への合理的配慮の提案

坂井 聡、附属坂出小

文部科学省のGIGAスクール実現推進本部(2019)では、ICT機器の環境整備の目標の一つとして「多様な子どもたちを誰一人取り残すことのない、公正に個別最適化された学びを持続的に実現させる」こととしている。これを実現するには、通常学級のなかに一定数いると推測されている読み書き困難児についても考える必要がある。そこで、香川大学教育学部附属坂出小学校の１年生から６年生の通常学級において、読み書きのアセスメントの１つであるURAWSSを実施した。本研究は、このアセスメントに基き１事例を抽出し、支援員がiPadを用いて学習の支援を行い、その効果を検討したものである。加えて、学校のなかに客観的で持続可能な支援を実現する方法についても検討した。

13 中学校国語科におけるストーリーマップを活用した新しい評価法と授業デザインの開発

山本茂喜、附属高松中、附属坂出中

今年度は、思考ツールを活用した新しい評価法と授業デザインの開発をテーマに、特にストーリーマップを援用した国語学習の方法について共同研究を行った。今回の実践研究では、ストーリーマップを用いて授業を「問題と解決」の枠組みにより構築するとともに、学習者が学びを自己のストーリーとして物語る「物語り自己評価」の有効性を追究した。

これまで我々は『思考ツールで国語の「深い学び」』（山本茂喜編著・東洋館出版社）を初めとして三冊の本を上梓しているが、今回の共同研究をもとに新しく研究書を出版する計画である。これまでのご支援に深く感謝するとともに、来年度以降もさらに共同研究を深化させていきたいと考えている。

14 附属学校園におけるローカルクラウド授業支援システムの構築

宮﨑英一、附属高松中、附属坂出中

本研究ではNAS（Network Attached Storage）用いた、比較的低コストで運用可能なローカルクラウド授業支援システムの構築を試みる。これはローカルクラウドとしてデータの保存・閲覧・ユーザの管理等、授業支援システムとして最低限の機能を有し、現場の教員がICTを活用する事により、今後出てくるICTを活用した新しい運用も含めて模索するものである。

本システムは、基本的にはマウスの操作（ドラッグ＆ドロップ等）だけで、運用ができるので、教員の学習コストが低く、現場教員が本来の業務に集中する時間を生み出し、教員の働き方改革にも繋がるものである。

また、学校現場において児童・生徒のデータを外部のデータセンター等に置く場合には、教員のセキュリティ面での心理的な抵抗が大きいが、本システムはローカルクラウドとして学校内の閉じたネットワーク内での運用になるので、心理的負担も軽いといえる。

令和元年度　教育実践集中講座　実践報告

先生になろう！　～自己の成長を教職に進む自信に～

仲西 長代 ・ 伊賀由美子 ・ 岡　静子

第一期（４～９月）

［第１回］５月18日（土）教育法規Ⅰ
「教員になる①」（仲西）
「教員になる②」（伊賀）
［第２回］５月20日（月）教職理解
「教職の魅力　教職とは」（伊賀）
［第３回］５月20日（月）学級経営
「学級で育つ子どもたちのために」（岡）
［第４回］６月１日（土）教育法規Ⅱ
「教員になる③」（仲西）
「教員になる④」（伊賀）
［第５回］６月17日（月）生徒指導
ケーススタディ
「生徒理解を基盤とした生徒指導」（伊賀）
［第６回］７月８日（月）道徳教育
ケーススタディ
「子どもの心を耕す道徳の授業」（伊賀）
［第７回］７月15日（月）子ども理解
「場面指導」ロールプレイ（岡）
［第８回］７月22日（月）子ども理解
「場面指導」ロールプレイ（岡）
［第９回］７月24日（水）子ども理解
「附属学校参観の心構え」（仲西）

第二期（10～３月）

［第１回］10月18日（金）教育課題の探究
「いじめと体罰」（伊賀）
「教員としての倫理観」（岡）
［第２回］11月11日（月）学級経営
「学級で育つ子どもたちのために」（岡）
［第３回］11月13日（水）教育実習事後指導
「教育実習を振り返って」
シンポジウム・助言（仲西・岡）
［第４回］11月14日（木）生徒指導・進路指導
ケーススタディ
「小学校の事例を中心に」（仲西）
［第５回］11月18日（月）教職理解
「学校について理解しよう④」（伊賀）
［第６回］11月18日（月）教育の最新情報
「教職への道Ⅰ」（仲西）
［第７回］11月22日（金）校種別による選択実務研修
「はばたけ若き力を生かして～４月からの心がまえ～」
中学校（伊賀）・小学校（岡）
［第８回］11月25日（月）教職理解
「～心に残る教師と伸びる教師～」（岡）
［第９回］11月28日（木）生徒指導・進路指導
ケーススタディ
「小学校における生徒指導の実際」（岡）
［第10回］12月２日（月）教育の最新情報
「教職への道Ⅱ」（伊賀）
［第11回］12月11日（水）人権教育
「学校教育における人権教育
小学校での取組事例に学ぶ」（岡）
［第12回］12月16日（月）教職理解
「授業について考える
よい授業とは・よい保育とは」（仲西）
［第13回］１月14日（火）道徳教育
ケーススタディ
「子どもの心を耕す道徳の授業」（伊賀）
［第14回］１月20日（月）子ども理解
「場面指導」ロールプレイ（岡）
［第15回］１月27日（月）子ども理解
「場面指導」ロールプレイ（岡）
［第16回］２月３日（月）教育の最新情報
「教師を目指しているみなさんへ」（岡）

教育実践集中講座では、教師という職業の魅力を伝えることを意識して臨みました。

生徒指導や教育法規の講座で、いじめや不登校、児童虐待などの対応について話すときは、受講生に不安を与えることになってしまわないように、同僚との協働性や組織対応の効果まで伝えられるよう内容を準備しました。教師という職業には多くの苦労や困難があります。しかし、教師の経験や勘に加え、法規などの知識を合わせて考えることで解決に向かうことができます。受講生は、自分一人の判断ではなく、組織で対応することの大切さを感じ取ってくれたのではないかと思っています。

また、授業づくり（教科、道徳、総合的な学習の時間）についての講座では、子ども主体の授業としていくことが欠かせないことを伝えるよう心掛けました。主体的・対話的で深い学びとするために、学習内容をどのように捉えるかを考える教材研究や、指導方法をどのように工夫するかを考えることなどを楽しみ、教材観、指導観を磨き続ける教師であってほしいです。そして、授業づくりに子ども理解は欠かせません。子どもの姿から、思考過程や背景など多くのことを見取ることのできる感度の高い目を養いたいものです。

教師は、子どもたちの純粋な心や豊かな発想に触れることができ、毎日新たな発見や感動のある、すばらしい職業です。子どもたちの夢と笑顔を大切にする教師をめざすために、受講生が教職に「夢」をもち、「笑顔」で進んでくれることを願っています。

令和元年度　センター公開講演会 報告

小学校英語指導と評価－観点別学習状況の評価の実際－　Part1

講師：宮城教育大学教育学部准教授　鈴木 渉 先生

令和元年９月７日(土)、独立行政法人教職員支援機構「教員の資質向上のための研修プログラムの開発・実施支援事業」として実施される英語ラボ研修会Ⅰを、公開講演会（共催）として開催しました。

「英語ラボ」は、外国語科の評価に対する小学校教員の不安を取り除くとともに、「評価」と「指導」は一体のものであり、「指導」の充実こそが主眼であること、「評価」はその手立てのひとつである、との理念の元に実施されました。

まず、鈴木 渉氏より、「小学校英語指導と評価－観点別学習状況の評価の実際」についてご講演いただきました。今回の学習指導要領の改訂で、外国語科では、小・中・高等学校を通して、４技能の中で「話すこと」が、[やり取り]と[発表]の２領域となりました。この「話すこと[やり取り]」を素材としながら、現行の評価の観点が４観点から、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の３観点へと変更されたことや、それぞれの観点の趣旨と、その意味について詳しく解説していただきました。

続いての演習は、「観点別学習状況の評価の実際」と題して行われました。文部科学省小学校英語教材から教材を選択して、参加された先生方に、具体的で実践可能な「評価規準」を作成することを求めました。参加者一人一人がまず自分自身で考え、その後、小グループに分かれてそれぞれの考えを検討するという形式で進められました。演習では、鈴木准教授とともに、香川県教育センターの清水由美指導主事と本学教育学部の中住幸治准教授が参加者の質問等に答えました。最後に、鈴木准教授からまとめの説明があり、「英語ラボ」を締めくくりました。

（文責：齋藤嘉則／元香川大学教育学部、現東京学芸大学）

小学校英語指導と評価－観点別学習状況の評価の実際－　Part2

講師：宮城教育大学教育学部准教授　鈴木 渉 先生

令和２年２月８日(土)、独立行政法人教職員支援機構「教員の資質向上のための研修プログラムの開発・実施支援事業」として実施される英語ラボ研修会Ⅱを、公開講演会（共催）として開催しました。

令和元年度の「英語ラボ」では「観点別評価」「指導と評価の一体化」についての理解と、評価規準作りの体験を大きなテーマとしており、いずれも繰り返し徹底すべき重要な事項です。そこで９月の研修会Ⅰと同じテーマに実践発表を加えて実施しました。

まず、鈴木 渉氏より、『観点別学習状況の評価の進め方』についてご講演いただきました。「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」という評価３観点への変更、それぞれの観点の趣旨、「他者に配慮しながら」を評価する上での注意点などについて、児童の発話例を検討しながら詳しく解説していただきました。

続いて、伊瀬吏沙氏（観音寺市立大野原中学校教諭）から『観点別学習状況の評価の実践事例案提案』について実践発表がありました。中学校での指導と小学校での訪問指導という両方の経験を活かして、小学校でどのように評価をすればよいかを、事例案を提示しながら分かりやすく解説していただきました。

その後、『観点別学習状況の評価の実際』という題目の演習では、来年度採択される小学校外国語教科書中の１単元について３観点別の「評価規準」の作成を求めました。参加者はまず個々で作成し、その後２～３人のグループでお互いの案を共有し合いました。作成中は鈴木准教授と中住が参加者の質問等に答えました。最後に、鈴木准教授からまとめの説明があり、「英語ラボ」を締めくくりました。

（文責：中住幸治／香川大学教育学部）

着任のごあいさつ

令和２年４月より、当センターで新たに２名の事務補佐員の方をお迎えすることになりました。

【事務補佐員　着任のご挨拶】

本年度、教職支援開発センターの事務補佐員として着任しました中山豊功と申します。不慣れな業務のため、皆さまにご迷惑をお掛けしないよう、日々精進してまいります。何とぞご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

【事務補佐員　着任のご挨拶】

今年４月から附属教職支援開発センター事務補佐員として着任いたしました清水真央と申します。学部は違いますが、自分が通っていた大学で仕事ができることを大変うれしく思います。

まだ着任したばかりで右も左もわからず周りの方々にはご迷惑をおかけしますが、少しでも早く仕事に慣れて先生方や学生さんたちのお役に立てるよう努力していきたいと思います。至らないところもあるかと思いますが、ご指導のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

附属学校園 この1年 2019

香川大学教育学部の各附属学校園より、2019年度の実践研究の取り組みについて ご報告いただきます。

附属幼稚園

附属幼稚園　研究経過報告

研究主題　保育するⅡ ～子どもとつくる明日～

1　研究主題について

子どもたちが身の周りの人やもの・ことと多様に関わり、それらの関係性の中で自分の思いや考えを生き生きと表出する主体的な子どもと、それらの関係性を捉え援助について考える中で自らも成長し向上し続ける保育者集団の絡み合う生活そのものを『保育する』という動態で捉え、保育実践の質の向上を追究した。

2　研究の内容

○事例検討と日々の営み（振り返り・週案検討）

昨年度の成果として、保育者に左図に示す３つの『保育観・保育間・保育感』が深まり、日々の生活や遊びの中で、子どもたちの主体的な姿と保育者の関わりが関係し合う保育実践の質の向上について述べた。そこで本年度は、その保育実践の質の高さを裏付ける子どもたちの具体的な育ちを明らかにした。

○語ろうデ-の実施

公立園の研修の場として、保育公開・保育討議・事例検討を実施した。多様な視点から自分たちの保育を振り返ることができ、育てたい資質・能力やそのための環境・援助を再認識することができた。

3　研究の成果・課題

保育者一人一人が生活や遊びの中で感じた「嬉しい」という視点から事例を書き起こし、その「嬉しい」に至るまでの子どもたちの過程と育ちについて捉えることで、保育の質の高さを具体的に示すことができた。さらに、子どもたちの過程と育ちを明確にすることで、自分なりの保育観の変容の過程を見つめ『保育する』について追究することもできた。

附属幼稚園 高松園舎

初等教育研究発表会　報告

研究テーマ　「ああしたい」「こうしたい」の実現に向けて ～子どもの遊びこむ姿を支える～

発表会当日の幼小交流活動

1　研究会の概要

２月７日、県内外から200名を超える参会者と共に、分科会での協議、松井剛太先生の講演などを通して学びを深めた。分科会では遊びこむ姿を引き出す教師の関わり方など議論を深め、参会者からも活発な意見が寄せられた。

2　研究主題について

遊びこむことで様々なことを体験し、その体験がつながることで学びが生まれ、子どもの育ちが充実すると捉え、遊びこむ姿やその過程を丁寧に見取ることを研究の柱とした。子どもたちの「ああしたい」「こうしたい」を実現するために教師はどのように遊びこむ姿を支えるのか、どのような環境や要因によって引き出されるのかを、事例検討を通して考えた。

3　研究の成果

「ああしたい」「こうしたい」という目的が生まれ、人やもの・ことと　関わりながら繰り返したり継続したりして没頭していく姿を「遊びこむ姿」と捉えた。「うまくいかない」「できない」という経験こそ子どもの心を動かし、その葛藤が「もっとやってみたい」「もう１回やってみよう」という思いを引き出し、遊びこむ姿につながることが見えてきた。また、自園の特徴や良さを教師自身が把握し、それを生かすことでさらに遊びを充実できるということもわかり、あらためて自園や保育を振り返る機会となった。

附属高松小学校

初等教育研究発表会　報告

本校は、平成25年度より文部科学省研究開発学校、そして平成29年度より教育課程特例校の指定を受け、テーマを「分かち合い、共に未来を創造する子どもの育成」とし、研究を進めてまいりました。テーマにある「未来」とは、多様な「ひと・もの・こと」と豊かに関わりながら、個性豊かな子どもたちが創り出すその時々の最適解であると同時に、それらの問題解決を経験していくことによって、子どもたち一人ひとりが“より自分らしく成長していくこれからの姿”でもあります。つまり、私たちが求める子ども像は、多様な価値観や背景をもつ仲間と分かち合いながら自分を磨き、どのような時代、場所、集団にあっても、自らの生き方・在り方を深化させていく姿だと捉えています。

そこに向かうために必要な資質・能力として、以下の３つの力を設定し研究を進めてきました。

○夢や憧れをもち、自律的に 学び続ける力　　○「ひと・もの・こと」へ共感的・協同的に 関わる力
○問題を解決し、知や価値を 創造する力

上記のような資質・能力を養うために、私たちはカリキュラムを「教科学習」と「創造活動」の２領域から構想し、子どもの「自律的に学び続ける姿」「共感的・協同的に関わる姿」「知や価値を創造する姿」を常に意識しながら指導や支援にあたってきました。そうした取り組みを続けてきたことで、各教科の重要な概念を理解することに留まらず、学校生活の様々な場面で３つの資質・能力を発揮する子どもの姿が見られるようになってきました。

初等教育研究発表会では、このような本校独自の２領域カリキュラムに基づき、教科学習、創造活動及び部活動の公開を行いました。２日間合わせて、県内外から1,500人の参会者があり、本校の研究及び子どもの姿に対して、様々な観点からのご質問やご意見を頂く中で、改めて本校が大切にしていくべき点が見えてきました。

主体的、共感・協同的、創造的に学ぶ子どもたち

今後も、子ども主体の研究実践を基盤にしながら、新しいカリキュラムの創造に取り組んでまいります。

附属坂出小学校

教育研究報告

研究主題　**互いに磨き合い、学び続ける子供の育成（２年次）**
－個の発達に応じ、メタ認知を促す授業づくり－

１　研究主題等について

県学習状況調査の結果より、県及び本校共に、子供たちの学習意欲を向上させていくことが課題となっていることが分かりました。その結果も踏まえて、子供たちの学習意欲をさらに高めていくこと、新学習指導要領に示された資質・能力を育成することを目指して、2018年度より「互いに磨き合い、学び続ける子供の育成」を研究主題とし、研究に取り組んでおります。その姿を具体的にイメージしながら、メタ認知を促す働きかけを行うことで、主体的に課題を設定し、協働しながら課題を解決していくとともに、そのような学び方のよさを実感できるようにしています。

２　本年度の取組と成果について

本年度は、教育研究発表会の開催がない年でした。しかしながら、日常の校内研究授業を公開することにより、多くの公立の先生方と共に、メタ認知を促す働きかけの効果や、目指す子供の姿等について議論し、研究を深めることができました。

本研究では、授業中の子供の姿や、質問紙調査の結果等を基に検証を行っています。検証を通して、授業を課題設定以前、課題解決中、課題解決後の三つの場面に分け、それぞれの場面で働きかけを行うことの有効性が確かめられました。解決することが妥当な課題を設定し、その解決に向けて、友達の考えと自己の考えを比べながら再考し、課題を解決して得られた成果や次に解決すべき課題を捉えることができるように働きかけることで、子供たちはメタ認知を働かせることができるようになり、主体的に学ぶ姿が増えてきているのです。

【活発な意見交換】

３　今後の方向

今後は、実践を積み重ねる中で、個の発達に応じ、メタ認知を促す働きかけの具体例を増やしていくとともに、公立学校の先生方にとってより活用しやすいものにしていきたいと思います。互いに磨き合い、学び続ける子供の育成に向けて、研究をさらに深めていきます。

附属高松中学校

研究開発の成果と今後の研究テーマ　報告

研究開発課題

これからの時代に必要な資質・能力「コミュニケーション能力」「創造的思考力」を育成するための新領域「創造表現活動」を設置し、表現に関する教育の充実を目指した教育課程の研究開発

本校では、文部科学省の研究開発学校指定を受けて「創造表現活動」を設置したカリキュラム開発に取り組んできました。今年度をもって５年間の指定期間が終了となり、その任を終えます。今年度は、「創造表現活動」の実践を充実させつつ、その理論と実践をまとめた研究書籍の制作に取り組みました。タイトルは、『未来を創造する学び　コミュニケーション能力・創造的思考力を育む新領域　創造表現活動の可能性』です。今年３月に発刊予定ですので、手に取っていただけると幸いです。

創造表現活動の様子

研究発表会の様子

また、「創造表現活動」を設置したことで見えてきた教科学習の在り方を提案する研究発表会を行いました。「教科の本質に迫る教科学習の在り方」と題した研究発表会に県内外から多くの先生方がご参会くださいました。

次年度からは、第８期の研究が始まります。本校では、10年程度を一区切りに、研究の大きな方向性を見直したり確認したりするために、期を設けています。研究集会で何度も議論を重ね、第８期のテーマを以下のように設定しました。学校は本質的に何をするところか問い、その問いに答える実践を試み、世に提案し続けていきたいと思います。今後の本校の研究に、ご期待ください。

第８期 研究テーマ 「学校を問い直す」

附属坂出中学校

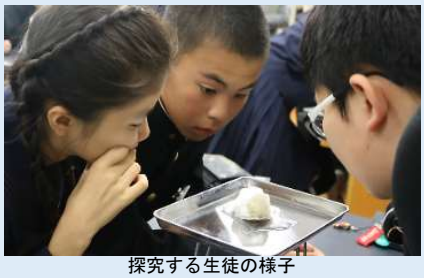
本校の研究について

研究主題　「わたし」が変わる「ものがたり」の学び

ー語り合い、探究する中で、「自己に引きつけた語り」を生み出すカリキュラムの提案ー

本校では、「自立した学習者の育成」をめざし、生涯にわたって学び続ける意欲やその基盤となる力の育成を中心に実践研究を継続してきた。今期は、前回までの研究を継承しつつ、カリキュラム全体で「自己に引きつけた語り」を生み出す教育実践を行っていくことで、生徒の学ぶ意味や価値の実感につなげ、生涯にわたって学び続ける生徒を育成することをめざしている。

語り合う生徒の様子



探究する生徒の様子

「自己に引きつけた語り」
「語る」行為[1)]の中でも、特に出来事（題材）と自己との関連を見つめ、時間軸の中でそれを筋立て、その出来事の自分にとっての意味づけや価値づけをする主体的な行為。

そして、上記のような「自己に引きつけた語り」を生み出すために、次の３点を重視した「ものがたりの授業」の実践を行い、研究を進めている。

①　生徒の「当たり前」の把握と、その変容の明確化
②　語り合い、探究する学びにつなげる学習過程
③　「自己に引きつけた語り」を促す教師のかかわり

また、昨年度より研究開発学校指定を受けた「共創型探究学習（ＣＡＮ）」は２年次を迎え、今年度は特に、幅広い課題の設定を促す工夫と生徒の探究活動を深める工夫に焦点化し、研究を進めた。

1)「語る」行為とは、素朴概念や既有知識、既習事項、自己の経験にもとづいて、時間軸の中で２つ以上の出来事の関連を筋立て、自分なりに意味づけ（結論づけ）たり価値づけたりする主体的な行為と定義した。

附属特別支援学校

本校の研究について

研究主題　「育てたい力」の育成をめざすカリキュラム・マネジメント
～小・中・高の学びをつなぐ学習内容の充実をめざして～

特別支援学校学習指導要領の中で、障害のある人のライフステージ全体を豊かなものとするために、学校教育段階から将来を見据えた教育活動の充実を図ることが示されています。そこで、児童生徒に「育てたい力（＝自立して生きる基盤となる力）」を育むために、それぞれの発達段階に応じた学習内容を検討するとともに、小・中・高の系統性をもたせ、それらの学びが卒業後の生活へとつながる授業改善と教育課程の検討をめざしています。

今年度の授業実践では、学びのつながりが見えやすい教科として国語科と算数・数学科を取り上げ、小・中・高の学部を越えた縦割り班で、授業検討や討議を行っています。算数・数学科の研究授業では、量についての学習内容を検討し、小学部は「重さ」、中学部は「等分」、高等部は「長さ」について取り上げました。縦割り班での意見を参考にしながら学部研究で授業改善を行い、児童生徒の実態に応じた学習内容、それぞれの生活につながる学習内容を設定することができました。今後の課題として、各実践の評価を基に教育課程の見直しを行うとともに、児童生徒の「育てたい力」について的確に評価し、個別の指導計画の評価・改善と教育課程の改善をつなげていきたいと考えています。

図1　箱幾つ分か予想して
シーソーにのせる様子

図2　体を基準にして
長さを予測する様子

教育実践総合研究（第42・43号）原稿募集

『香川大学教育実践総合研究』第42号は**2020年11月30日（月）**原稿受付締切、第43号は**2021年５月31日（月）**原稿受付締切予定です。以下投稿要領をご参照の上、奮ってご投稿ください。

香川大学教育実践総合研究　投稿要領

１（投稿の要領）
香川大学教育実践総合研究（以下「教育実践総合研究」という。）への投稿については、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、この要領の定めるところによる。

２（投稿の内容）
教育実践総合研究は、教科教育、教育臨床など広く教育実践に関する独創的な研究論文・実践報告、資料（研究ノート、研究動向の紹介など）及び香川大学教育学部附属教職支援開発センターの活動報告などを掲載する。

３（投稿者）
教育実践総合研究に投稿できる者は、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、香川大学教育実践総合研究編集会議（以下、「会議」という。）が特に依頼した者とする。

４（投稿原稿の提出方法）
投稿原稿は、完成原稿とし、原則として電子文書で作成し、印刷原稿２部と、その電子ファイルを会議に提出する。

５（投稿原稿の長さ）
投稿原稿の長さは、刷り上がり１４頁（１頁は２１字×４２行×２段）以内を原則とし、偶数頁になることが望ましい。超過する場合は、会議の議を経て認めることがある。

６（刷り上がり１頁目の形式）
刷り上がり１頁目は、和・英文のタイトル・著者名・所属（所在地）、和文要旨（200字）及びキーワード（５語）を含むものとする。

７（投稿原稿の取り扱い）
投稿された論文等は査読を行い、会議においてその取り扱いを次のいずれかに決定する。査読者については、会議において決定する。
（１）採録　（２）条件つき採録　（３）返戻

８（校　正）
校正は原則として３校までとし、投稿者において速やかに行うものとする。その際、印刷上の誤り以外の訂正、挿入、削除は原則として認めない。

附則　本要領は、平成１６年４月１日から適用する。
附則　本要領は、平成１７年１２月１４日から施行し、平成１７年１１月９日から適用する。
附則　本要領は、平成１９年４月１日から施行する。
附則　本要領は、平成２７年４月１日から施行する。

香川大学教育学部附属教職支援開発センターニュース
（No. ８）
発行日　令和２年５月20日　　代表者　松村　雅文
教職の かゆいところに 手が届く。
香川大学教育学部　附属教職支援開発センター
〒760-8522　香川県高松市幸町 1-1
Tel.087-832-1683　Fax.087-832-1689
http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~j-cen/

CEDS_Tel&URL

寄贈図書（2018/04/21～2019/04/20）

教育実践総合センター紀要　第35号　2017　平成30年２月	大分大学教育学部附属教育実践総合センター
教育実践総合センターレポート　第37号　平成29年12月	大分大学教育学部附属教育実践総合センター
群馬大学教育実践年報　第７号　2017年	群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター
立正大学　臨床心理学研究　第16号　2017年度	立正大学心理臨床センター
教員養成カリキュラム開発研究センター　研究年報　Vol.17　2018.3	東京学芸大学 教員養成カリキュラム開発研究センター
教員養成カリキュラム開発研究センター　第18回シンポジウム記録集 これからの学校教育と教員養成カリキュラム　学びの原点に立ち返る ―「理科」と「社会科」の間―	東京学芸大学 教員養成カリキュラム開発研究センター
心理相談研究紀要　第16号　2017年度	神戸親和女子大学心理・教育相談室
鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要　第27巻　2017	鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター
岐阜大学教育学部　特別支援教育センター年報　第25号	岐阜大学教育学部 附属特別支援特別支援教育センター
鳥取大学教育研究論集　第８号　2018年	鳥取大学　教育支援・国際交流推進 教員養成センター
心理臨床事例研究　愛媛大学心理教育相談室紀要　第14号　2018年４月	愛媛大学教育学部 附属教育実践総合センター　心理教育相談室 愛媛大学大学院教育学研究科 学校臨床心理専攻　臨床心理学コース
愛媛大学教育実践総合センター　紀要　No.36　2018	愛媛大学教育学部附属教育実践総合センター
教育方法学研究　日本教育方法学会紀要　第43巻　2017	日本教育方法学会
生徒指導上の諸課題の現状と文部科学省の施策について	文部科学省初等中等教育局児童生徒課
琉球大学教育学部　教育実践総合センター紀要　第25号　2018	琉球大学教育学部附属教育実践総合センター
平成29年度　子ども理解と実践的指導力の向上を目指した「教育実践ボランティア」事業に関する実践報告書　第22号　平成30年３月20日	琉球大学教育学部附属教育実践総合センター
学校教育実践学研究　第24巻　2018	広島大学大学院教育学研究科 附属教育実践総合センター
平成29年度広島大学教育学部フレンドシップ事業 ゆかいな土曜日　実施報告書　平成30年３月	広島大学教育学部 フレンドシップ事業運営委員会
ルーテル学院大学大学院　臨床心理相談センター紀要　2018　Vol.11	ルーテル学院大学大学院 臨床心理相談センター
札幌学院大学　心理臨床センター紀要　第18号　2018年７月	札幌学院大学心理臨床センター
教育実践研究　第44号　平成30年10月	金沢大学人間社会学域学校教育学類 附属教育実践支援センター
横浜国立大学大学院　教育学研究科　教育相談・支援総合センター研究論集 第18号　2018年	国立大学法人　横浜国立大学
富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究　第13号　平成30年12月	富山大学人間発達科学部 附属人間発達科学研究実践総合センター
鳴門教育大学　学校教育研究紀要　No.33	鳴門教育大学　地域連携センター
花園大学　心理カウンセリングセンター研究紀要　【第13号】　2019	花園大学　心理カウンセリングセンター
平成30年度学位論文　地域学習教材としての「四国遍路」の現状と課題 ―香川県の小・中学校を事例として―	香川大学大学院教育学研究科　川人　有史
研究紀要　第46号　平成31年	広島県立教育センター
心理相談研究紀要　第17号　2018年度	神戸親和女子大学心理・教育相談室
教員養成カリキュラム開発研究センター　研究年報　Vol.18　2019.3	東京学芸大学 教員養成カリキュラム開発研究センター
教員養成カリキュラム開発研究センター　第19回シンポジウム記録集　これからの学校教育と教員養成カリキュラム　教員の「学び」と「育ち」を問い直す	東京学芸大学 教員養成カリキュラム開発研究センター
山形大学　教職・教育実践研究　第14号　2019年３月	山形大学教職研究総合センター
群馬大学教育実践研究　第36号　2019年３月	群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター
中等教育研究紀要　第65号　2018	広島大学附属中・高等学校
中等教育研究開発室年報　第32号　2018年度	広島大学附属中・高等学校 中等教育研究開発室
教育実践総合センター紀要　第36号　2018　平成31年３月	大分大学教育学部附属教育実践総合センター
教育実践総合センターレポート　第38号　平成30年12月	大分大学教育学部附属教育実践総合センター
長崎大学教育学部教育実践研究紀要　第18号　2019年３月	長崎大学教育学部
次世代教員養成センター研究紀要　第５号　2019.3	奈良教育大学　次世代教員養成センター
広島国際大学心理臨床センター紀要　第17号　2018	広島国際大学心理臨床センター
夢　平成30年度「ちゃぶ台方式」教職研修部事業報告書	山口大学教育学部

教職支援開発センター活動報告（2018/10/01～2019/04/20）

＜平成30年度＞

10月16日（火）　第六回専任会議
10月19日（金）　教育実践集中講座（第二期１回目）
10月20日（土）　公開講演会
10月24日（水）　教育実践プレ演習第四回全体授業
11月13日（火）　第七回専任会議
11月19日（月）　教育実践集中講座（第二期２回目）
　　教育実践集中講座（第二期３回目）
11月21日（水）　教育実践演習第七回全体指導
11月22日（木）　教育実践集中講座（第二期４回目）
11月28日（水）　教育実践演習第八回全体指導
　　教育実践集中講座（第二期５回目）
11月30日（金）　教育実践集中講座（第二期６回目）
12月３日（月）　教育実践集中講座（第二期７回目）
12月６日（木）　第三回編集会議
　　教育実践集中講座（第二期８回目）
12月10日（月）　教育実践集中講座（第二期９回目）
12月11日（火）　第八回専任会議
12月12日（水）　教育実践集中講座（第二期10回目）
12月21日（金）　第四回編集会議
１月15日（火）　第九回専任会議
　　第五回編集会議
　　教育実践集中講座（第二期11回目）
１月21日（月）　教育実践集中講座（第二期12回目）
　　教育実践集中講座（第二期13回目）
１月23日（水）　第六回編集会議
１月28日（月）　教育実践集中講座（第二期14回目）
２月13日（水）　第一回教職支援推進部門会議
２月15日（金）　第94回国立大学教育実践研究関連センター協議会
２月19日（火）　第十回専任会議
２月20日（水）　第一回教育開発推進部門会議
２月21日（木）　第一回実地教育推進部門会議
３月４日（月）　第19回学部・附属学校園教員合同研究集会
３月５日（火）　第十一回専任会議
３月７日（木）　第二回運営委員会

＜平成31年度＞

４月10日（水）　特別支援教育実践演習全体指導
４月11日（木）　教育実践演習　第一回全体指導
４月16日（火）　第一回専任会議
４月18日（木）　教育実践演習　第二回全体指導

教育実践総合研究（第40・41号）原稿募集

『香川大学教育実践総合研究』第40号は**2019年11月29日（金）**原稿受付締切、第41号は**2020年５月29日（金）**原稿受付締切予定です。以下投稿要領をご参照の上、奮ってご投稿ください。

香川大学教育実践総合研究　投稿要領

１（投稿の要領）
香川大学教育実践総合研究（以下「教育実践総合研究」という。）への投稿については、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、この要領の定めるところによる。

２（投稿の内容）
教育実践総合研究は、教科教育、教育臨床など広く教育実践に関する独創的な研究論文・実践報告、資料（研究ノート、研究動向の紹介など）及び香川大学教育学部附属教職支援開発センターの活動報告などを掲載する。

３（投稿者）
教育実践総合研究に投稿できる者は、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、香川大学教育実践総合研究編集会議（以下、「会議」という。）が特に依頼した者とする。

４（投稿原稿の提出方法）
投稿原稿は、完成原稿とし、原則として電子文書で作成し、印刷原稿２部と、その電子ファイルを会議に提出する。

５（投稿原稿の長さ）
投稿原稿の長さは、刷り上がり１４頁（１頁は２１字×４２行×２段）以内を原則とし、偶数頁になることが望ましい。超過する場合は、会議の議を経て認めることがある。

６（刷り上がり１頁目の形式）
刷り上がり１頁目は、和・英文のタイトル・著者名・所属（所在地）、和文要旨（200字）及びキーワード（５語）を含むものとする。

７（投稿原稿の取り扱い）
投稿された論文等は査読を行い、会議においてその取り扱いを次のいずれかに決定する。
査読者については、会議において決定する。
（１）採　録
（２）条件つき採録
（３）返　戻

８（校　正）
校正は原則として３校までとし、投稿者において速やかに行うものとする。その際、印刷上の誤り以外の訂正、挿入、削除は原則として認めない。

附則
　本要領は、平成１６年４月１日から適用する。
附則
　本要領は、平成１７年１２月１４日から施行し、平成１７年１１月９日から適用する。
附則
　本要領は、平成１９年４月１日から施行する。
附則
　本要領は、平成２７年４月１日から施行する。

香川大学教育学部附属教職支援開発センターニュース
（No. ７）
発行日　令和元年６月10日　　代表者　松村　雅文

教職の かゆいところに 手が届く。

香川大学教育学部　附属教職支援開発センター

〒760-8522　香川県高松市幸町 1-1
Tel.087-832-1683　Fax.087-832-1689
http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~j-cen/

CEDS_Tel&URL

編集の関係上、本号（第７号）が皆様のお手元に届くまで時間を要しましたこと、お詫び申し上げます。